
青い空

オレ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青い空

【Nコード】

N2919BA

【作者名】

オレ

【あらすじ】

後々語られていくが

非常に主人公が大変な物語

大変な日々（前書き）

個人的に

乗せたかったので乗せました。

大変な日々

俺の名前は鉄原龍二。

年は16歳。

希望が丘高校に通っている。

いたって普通の高校生なのだが

両親がいない兄弟もいない。

いたといえばいたのだが死んでしまった。

正確に言えば殺されたのだ。

誰かに。

俺はそれを探すためにこの学校に来ている。

この学校は何か隠してる。

日本中を巻き込むようなことを。

なぜわかるかは放課後にでも話すとしよう。

今は午前8半。

学校に着いたところだ。

「おはよー」

龍「おはよー」

クラスメイトと軽く挨拶をする。

このクラスには明るい人が多い。

俺がクラスになじんだというか周りが早く受け入れてくれたという
ほうが正確だ。

このクラスでよかったと思いつながら自分の席に着く。

一息つきながら今日の予定を頭の中で確認していく。

「今日はあれがあるな」
とつぶやく。

今日の予定を確認し終わってボーっとしていると

後ろから声をかけられる。

？「おはよー」

龍「うん？」

後ろからこえをかけたのは

若井香梨

しっかりしててちょっとドジで見ているとたのしい。

みんなに好かれている。

その後ろから来たのは

真田真由美。

こっちはクラスメイトから聞いたがツンデレらしい。

少し話したことがあるが普通だったけどよくわからない。

もっと仲良くしないとみれないのか。

真田「おはよ」

龍「うつつ」

軽い挨拶。

そしてチャイムが鳴る。
ホームルームが始まる。

？「席につけーっと」

先生が入ってくる。

彼の名前は小林 和義
みんなコバカズと呼んでいる。
非常に人情深くていい先生だ。

ホームルームは特に目立ったことはなかった。
動画というカットの部分だ。

そして授業が始まり終わっていく。
その繰り返し。

正直授業は聞いてない。

ノートを書いているだけだ。

俺がこの学校にきている理由は

授業を受けに来ているわけではないからな。

ぼーっとしている間に授業をも終わり、
昼休みだ。だが学校のことは追々紹介したいのでカット。
そして放課後。

俺はけいおん部に所属している。

これは意味があつて本当は野球をしたことがあつて
野球部に入りたかつた。

でも部はサボりたくないの
時々かおを出している。

本当ならば今日もけいおん部にいくのだが
用事がある。いけないのだ。

最初のほうに言った理由を話したいと思う。
なぜこの学校何か隠しているかという
実はこの学校はある団体を作っている。

町に人も生徒すら知らない団体。
それに俺は入っている。

名前は「特殊任務隊」なんて花がない名前だろう。

でも国が決めた規定で能力を測りランクをつけるといって結構真面目な団体だ。

俺はこの団体に所属している。

この団体のランクを上からいうと、A B C D Eの順だ。

でも俺はこのランクのいずれにも所属していない。
なぜか。

それはAの上のランクがあるからだ。

Aの上限は100メートル11秒、砲丸投げ40メートルなど超人並みのやつがそろうとこだ。
その上をいくやつらが集まる。

俺らはそれをSランクと呼んでいる。
俺のほかにあと3人いてその人たちもやばいといわざる終えないほどすごい。

で実はそのSランクの人たちが集まるのが
けいおん部なのだ。
けいおん部としての活動もしているけどね。

そして今日はSランクとしての任務をする日だ。

辛い任務だが苦にはならない。
だって今日はSランクの人たちと任務をする日だからだ。

楽しいしおもしろい。

龍「さて行くかな・・・」

そういつて俺は歩き出した。

天才（前書き）

テキストです。

天才

突然だが天才とは何か皆さんはわかるだろうか。
ひとつ覚えてしまえばなんでもやっけてしまう人たちのことを
さす言葉だろう。

だがこの言葉にふさわしい人物など
過去や現在にいるのだろうか？
過去現在「天才」と呼ばれる人たちは
必ずしも「努力」を通ってきたに違いない。

イチローだって努力を続けてきた。
なぜこの話を最初に言っているのかというと
実はオレの目の前にはこの時代の天才と呼ぶにふさわしい人たちが
4人もいる。

龍「さて今日のミッションの確認をしておきましょうかね」

？「……………」

今黙っていてちょっとふてぶてしい顔しているこの人が

真田正志。（男）

さっき言った天才の中で1番の才能を持つ人と言っていていいだろう。

なぜならこの前130キロの球を（硬式）
後ろ向きながら当たるすれすれのところを取った。
目の前で見ていたけれど言葉で表せないくらいすごかった。
でもいつも暴走気味なのがちょっとね。

？「で、今日はどこに行くんだ。」

今しゃべった少し髪が長い男のイケメンは
伊達義彦。

清く正しくてかっこいい人だ。

こちらもすごい人でいつも冷静でどんな時でも
1番いい判断ができる人だ。
だけど発言するのが苦手なのかいつも
何か提案するときの声が小さいのでなかなか伝わらない。

龍「今日はここから東に行ったところに
廃ビルがあってそこで麻薬の密売が行われるように
そこを取り押さえるようにと。」

正「そんなの警察に任せておけばいいじゃん。」

龍「何でも外国とかからいつぱい来ているようで
平気で銃とか使って攻撃してくるから警察では取り押さえるのが
難しいみたいです。」

正「……………」

このひとが黙っていると大体は怒っている。
てかそれしか見たことない。

義「しっかしアイツは今日もおそいな。」

龍「そうですね……………」

実は今三人目の「天才」が来ていない。
四人目はいまここにはいないからあとで紹介しよう。
今予定時間より約30分たっている。

ミッションの時間は2時間前から潜入することになっているのだが
遅い。もしかしたらこれで正志さんはいらついているかもしれない。
早く来てくれー！。と心の中で叫んだその時、

？」「ごめーーーーん」

やっときた。

義「遅い！」

正「……………」

この人は上杉武文。

この人は非常に集中力があって

ミッション中は話かけたら切られそうなほどだ。

だけど今の通り時間にルーズなところがあって毎回困っている。

龍「では細かいところは歩きながら説明するので

軽く急ぎながら行きましょう。」

そうして俺たちは歩き出した。

歩きながら説明していく。

龍「麻薬密売で中心的に動いているのはロシアのマフィア。そして受け取るのは中国と韓国のマフィアです。」

義「何で日本のマフィアがないんだ？」

龍「ロシアのマフィアは国を追われていていろいろな国を転々としていて今は日本にいるそうです。」

正「なんでロシアの警察は動かないんだ？」

龍「実は国に追われている理由が大量虐殺でロシアのとある町の住人をほぼ全員でかい施設に密閉してサリンで殺したとか何とか。で、それからもさまざまな事件を起こしまくってロシア政府も国連もなかなか手の出さずらい組織にまでになってしまったんです。」

武「それなんで俺たちが処理しなきゃいけないの？なぜ中国と韓国のマフィアがつかってんの？」

龍「中国と韓国は知らないけど国連が動けないから当然日本政府も動けないので俺たちが動く羽目になったんですよ。」

と話していると目的の建物についた。

龍「いやー不気味ですねー。」

見た感じ普通に何か出そうな感じな建物だ。

このビルには自殺現場とかいろいろな噂がある。

正直このビルには入りたくない。

そう思っていると耳元からかわいい声が聞こえてくる。

？「応答お願いします。」

龍「こちらランクS。」

耳には小型のワイヤレスが仕込まれている。
かなり広範囲で使えるかなりいい代物だ。
そしてこの声の主は毛利夕実。

オレと同じ年で違うクラスだけど結構かわいい。
ミッションだとオペレーションがすごくうまくて
伝わりやすい。だけど毎回おどおどしてこまる。
そこがかわいいんだけど。

言い忘れたが伊達さん、真田さん、上杉さんはオレの1上だ。
だがしかし、なぜかオレがSランクのリーダーを務めている。
なんかまとめる力があるとか何とか。
先輩がいるのにリーダーとか正直気まずいところもある。結構大変だ。

タ「敵はビルの3階にいます。全員ばらばらに行動してください。」

正「お前は四人もオペレーションできるのか」

タ「え、えっと・・・やってみます。」

義「どんな作戦で行くんだ？」

タ「多分見張りとかが多いと思われませんが相手は追われる身ですからきつとある程度固まっていると思うので四人で場所を把握していきますながら」

三人は密売のマフィアのボスを捕らえる。1人は逃走ルートの確保でいきましょう。」

武「それって敵が追ってこない？しかもどうやってボスだけ捕らえるの？」

タ「しっかりボスの位置と確認して催涙弾を投げてボスは気絶させましょう。」

先輩方ならできるでしょう。追ってきたら日本警察が手を貸してくれて

何とかするとの話です。」

龍「で、肝心の役割は？」

タ「リーダーが決めてくださいよ。」

龍「・・・・。今回は伊達さんが逃走ルートの確認。」

真田さん、上杉さん、オレは別々にビルに入る。

伊達さんのルート確認後催涙弾を投入。そしてすばやく撤退し

その場にいる日本警察に身柄を渡して近くに神社に集合。

その時は夕実もきてくれ。」

夕「何かあるんですか？」

龍「ああ。少しな。」

龍「今回も全員生きて帰るように！」

四人「了解！」

その掛け声と共に俺たちはビルえと駆け出した。

戦闘（前書き）

考えているけれどこの話の終わりが無い。

戦闘

午後7時。

4時に学校を集合して6時にミッション開始なのだが
予定より1時間遅く始まった。

上杉さんの遅刻がうまく時間調節してくれた。

おかげで中をゆっくり見れたのだが

このビルにはどこで麻薬の密輸が行われるかわからないほど
部屋が多くある。

小さい部屋で行われたら見つけるのに大変だ。

そこでSランクだけが使える特別ワイヤレス盗聴器。

(このワイヤレス盗聴器は特別な音波で盗聴することができる。
とにかくすごい)

これを各部屋に設置しておく。

大体これで相手の位置がわかる。

三つの国の言葉が話されるので1番いい手だ。

なんて話しているかはわからないけど。

夕実がいればなんとかなるだろう。

いまは密輸が行われそうなところを3人で別々に待機している。オレが3階にいて真田さんが5階、上杉さんが4階にいる。オレが3階にいる理由は中間だから。一番上は一番上は下から攻められたらやばいから。ヘリコプターで逃げてもいいけど国連が追っている組織だから上空からも攻撃されるだろう。

1番下は上から攻撃されればだめだからね。だから中間だと思っただけ。でもロシアのマフィアはバカだと思っ。密輸をビルでやらなければいいと思っ。船の上とかね。

ここで音のない通信が入る。
タッチパネル式の通信機。そこには
・ ターゲット補足。三階。1番右上。急行せよ。
夕実からだ。相変わらず早いと思っ。敵が入ってから10分。音だけよくわかるものだ。

オレの予想は的中。オレは結構近くにいる。屋根裏を通り目的地に急ぐ。いつ密輸が終わるかわからない。移動中、3メートルくらいから光が漏れている。多分あそこなのだろう。

到着して中を確認。大柄な男が三人普通の男が三人だ。
大柄の男がボスで他三人が通訳だろう。

オレは通信機で報告する。

・ 目的地の到着。ほか二人が来るまで待機。
・ 時間が空くのでミッションの細かい説明などしようかな。

ミッションは星の数でミッションの難しさが決まる。
たとえばこのミッションはSランク星2だ。
Sランクは「Sランク」でひとくりされてるけど
Aランク以下はAランクと星の数で組織されている。

なぜSランクは星が関係なく組織されているのかというと
実はSランク星5を基準にして入団を決めているから。
Aランク以下は人数多いんでね。いっぱい作らなきゃダメだからね。
でもそれだけSランクは精鋭が集まる場所というわけです。

説明している間に集まったみたいだな。

あとは伊達さんを待つだけだな。

伊達さんはどんな場所でも冷静に動けるからこういう仕事は得意だ。
まさに適材適所だね。

伊達さんを待つている間に細かい移動を確認しておく。
夕実とも軽く打ち合わせをしておいた。
下手したら俺たち全滅もありえる状況だ。慎重に行わなければいけない。

そして伊達さんから通信が入る。逃走ルートを個人で確認する。

小物入れから催涙ガスを取り出す。

これをオレが投げたら合図だ。息を整える。

3、2、1・・・。投げた。

敵がひるむ。その隙にオレが部屋に突入。真田さんと上杉さんが用意してあった

ワイヤーで部屋と部屋をつなげるドアを閉める。

敵がひるんでいる隙に軽くボスの三人のあごを殴って脳震盪を起し動きを封じ

真田さんと上杉さんに二人のボスを渡す。この間を五秒で済ます。オレが屋根裏にあがるうとすると

バキーン！

龍「っ！」

銃弾が右腕にあがる。敵が乱射してきた。

すぐに屋根裏に上がりミッションにすぐ戻る。

そのあとあごを殴り脳震盪を繰り返しビルから出る。

すぐに身柄を警察に渡してミッション終了。

龍「ふう……。」

義「今日も無事にできたな。」

武「そうだねー。」

正「お前はいつもあれくらい集中できたらいいのにな。」

ビルのほうから銃声が何度も聞こえる。

銃撃戦にでもなっているもだろうか。

でも警察に任せるといわれていたのだからいいだろう。

今日も無事でよかったと思いき空を見上げる。

そして同時に右腕に激痛が走っているのを思い出す。打たれたところだ。

龍「……。」

傷口をよく見てみる。貫通はしていない。

どうやら弾は腕の中に残っているようだ。

夕「みなさーん！」

夕実が走ってくる。

神社に集合忘れていた。

夕「だいじょうぶですか？みなさん。」

正「ああ。みんな死んではない。」

義「大丈夫だ。」

武「全員無傷だよ。」

龍「俺撃たれたんですけどね……。」

夕「どこですか!？」

龍「右腕。あとで行きつけの病院に行ってくるよ。」

武「そういえばなんか大事なこと言うんじゃないかなかったんだだけ。」

龍「たいしたことないですが、今年も夏休みあの行事があるので
Aランク注目選手を考えて置いてください。」

正「あれか。メンドクサイな。おもしろいけど。」

龍「ちゃんと考えてくださいね。命に関わるから。」

正「おい。あそこにAランクの精鋭たちがいるぞ。あれはAランク
星5だ。」

龍「別に無理して決める必要はありませんよ。今年もナシはきつい
ですけどね。」

武「去年はいなかったからねー。入団者。今年はその中から入って
ほしいなー。」

龍「だれかきましたよ。」

真「何でここにいるのお兄ちゃん。」

実はいつてなかったと思うが真由美と真田さんは兄弟なんだよね。並べてみると結構似ているなあ。

真田（妹）のに続いていつぱいついてきた。

この中からSランクにきてほしいなー。

あれはこの中に知人は真田（妹）だけだからよかった。と、思ったら香梨がいた。

香「あれ、龍二君なにしてるの？」

龍「え、えっと・・・」

返答に困る。

直球にミッションしてたとかいえないしどうごまかせばいいのやら。そしてさつきから右腕が温かい。血が予想以上に出ている。どうにかして早く病院にいかなければ。

？「はい、ちよつとどいてねー。」

そこへ救いの神が舞い降りた。

彼女は真田良子。真田さんのお母さんだ。じつはひと世代前のSランクのひとだ。結構若い。

良子さんは看護婦をやっていて救急車でここへきていた。結構銃撃戦になっていたが人が出ていないと思う。

オレ以外な。

良「けが人はいないようね。」

龍「良子さん！」

良「なに？龍二君。」

小さい声で話す。

龍「実はAランクのひとに見られちゃって助けてください！」

良「でも貴方怪我してないから救急車に乗せられないのよ」

龍「右腕……」

右腕を見せる。

良「これは結構重症ね。これくらいなら乗せてもいいかな。

じゃあ、歩いてきて。」

龍「真田さん。お先です。」

そういつてこの場を俺は逃れた。

戦闘（後書き）

かくのくるこい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2919ba/>

青い空

2012年1月12日00時50分発行